

特集 ■ 新脳卒中治療ガイドラインを巡って

このたび、一般に公開される脳卒中治療ガイドライン改訂版（第2版）について、日本リハビリテーション医学会の脳卒中治療ガイドライン策定委員会委員の方々に、その役割と展望、そして担当されている各分野についてのポイントを、分かりやすくご解説いただきました。

リハビリテーションにおける治療ガイドラインの役割と今後の展望（生駒一憲氏，1099頁）――

日本リハビリテーション医学会の診療ガイドライン委員会の成果をみると、リハビリテーションが非科学的なものではないことを改めて認識することができる。脳卒中治療ガイドラインに対する日本リハビリテーション医学会の取り組みを中心に、リハビリテーションにおける治療ガイドラインの役割についてまとめている。

リハビリテーションの流れ・評価・予測（原 寛美氏，1104頁）――

「リハビリテーションの流れ」、「評価」、「予測」の3項目について、新旧ガイドラインの推奨レベルの変化などの主な相違点について解説している。

急性期リハビリテーション（越智文雄氏，1109頁）――

初版では「リハビリテーションの体制」に記載していた「脳卒中ユニット」に関する記述が、改訂版では「急性期リハビリテーション」の項に変更された。本稿では、「脳卒中ユニット」も含めた「急性期リハビリテーション」について主な改訂点を解説している。

回復期・維持期リハビリテーション（和田 太氏，1115頁）――

2000年の診療報酬改定で回復期リハビリテーション病棟入院料が導入され、リハビリテーションが、急性期から始まり、回復期を経て、維持期につなげていく流れは、かなり定着してきた。本稿では、「回復期・維持期リハビリテーション」について、改訂版ガイドラインの改変の特徴について解説している。

運動障害・ADLのリハビリテーション（藤原俊之氏，1121頁）――

運動障害・ADLのリハビリテーションに関しては、治療医学としてのリハビリテーション医学の真髄を示す領域であり、この領域でのエビデンスの確立が重要な課題である。本稿は、運動障害・ADLのリハビリテーションを中心に、関連する歩行障害、上肢機能障害における訓練量や各治療法を概説するとともに、今後の展望について解説している。

患者・家族教育（小林一成氏，1125頁）――

脳卒中リハビリテーションにおいては、患者および家族に必要な情報を提供し、実践できるように適切に教育することが重要であるにもかかわらず、この分野における科学的なエビデンスは絶対量が不足している。新ガイドラインでは新たに6編の引用文献を加え、「患者・家族教育」という視点の充実を図っている。本稿では、この分野における新ガイドラインのエビデンスと、旧ガイドラインとの違い、現状の課題などについて解説している。

病型別リハビリテーションの進め方（特に急性期）（中馬孝容氏ら，1129頁）――

「脳卒中治療ガイドライン2009」の「病型別リハビリテーションの進め方（特に急性期）」では、旧ガイドラインへの追記および附記がなされ、一般臨床家にとっても分かりやすい解説となった。